様式Ｃ－１９

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成２４年５月 18 日現在

機関番号：１７１０２
研究種目：若手研究（B）
研究期間：2009～2011
課題番号：21792263
研究課題名（和文）
外来化学療法を受ける子どもと家族のヘルスプロモーションを促す看護援助に関する研究
研究課題名（英文） Nursing care to supports health promotion of children with cancer and their families undergoing outpatient chemotherapy
研究代表者
藤田　紋佳（FUJITA AYAKA）
九州大学・医学研究院・保健学部門
研究者番号：10437791

研究成果の概要（和文）：
本研究は、外来化学療法を受けた子どもと家族の現状を明らかにし、外来化学療法を受ける子どもと家族のヘルスプロモーションを促す看護援助を検討することを目的とした。外来化学療法を受けた（受けている）急性リンパ性白血病の子どもを持つ保護者を対象に日常生活の現状について質問紙調査を行った。その結果、親は、外来化学療法中の子どもの体調管理等において、種々の困難を抱えていた。外来化学療法中の子どもと家族の特徴や状況に合わせた、看護支援の必要性が明らかとなった。

研究成果の概要（英文）：
This research aimed to uncover the state of families with children in outpatient chemotherapy to realize nursing care supports their health promotion. The parents of children with acute lymphoblastic leukemia who have faced outpatient chemotherapy were interviewed and their daily life experience was studied by questionnaire method. Our survey revealed that most parents suffered from difficulties in managing their child's physical condition during the outpatient therapy. Nursing supports finely tailored to each family are strongly required.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
２００９年度	1,300,000	390,000	1,690,000
２０１０年度	900,000	270,000	1,170,000
２０１１年度	900,000	270,000	1,170,000
年度			
年度			
総　計	3,100,000	930,000	4,030,000

研究分野： 医歯薬学
科研費の分科・細目：看護学・生涯発達看護学
キーワード：外来化学療法、子ども、家族

1. 研究開始当初の背景

過去 20 年間に小児がんの治療はめざましく進歩し、化学療法、放射線治療、外科治療などの集学的治療により小児がん患児の70％以上は長期生存が期待できるようになった。しかし、身体的･精神的に成長途上に発病するため、疾患のみの影響だけではなく、治療の影響（成長障害や二次がんなどの晩期合併症等）を強く受ける。小児がんの子どもは、治療後にも 4、50 年にわたる長期の生命

予後が期待され、復学や社会復帰、就労、結婚などを含めた多くのライフイベントを迎えるため、自立支援を含めた長期的な支援の重要性が高まっている（石田，2007）。

以前は化学療法を入院で行うことが一般的であったが、近年、急速に外来化学療法へと移行している。理由として、医療者･患者サイドの意識の変化や患者の生活の質（QOL）の変化、外来治療で投与可能な抗がん薬の開発や支持療法の進歩などとともに、医療経済的な状況の変化（社会保険診療報酬改訂での外来化学療法加算の新設等）も大きく関与している。より効果的で安全で質の高い医療を提供するには、解決しなければならない問題も多い。問題としては、短期間での効率良い患者教育の実施や、継続看護、日常生活への影響を考慮した心理･社会面への援助、事故防止対策などがある。そのため、外来化学療法を受ける患者や家族に対して、看護実践プログラムやセルフケア支援プログラムなどの研究の取り組みがなされているが、いずれも成人患者を対象としており、小児がんの子どもと家族を対象とした外来化学療法における研究は皆無である。

成長･発達段階にある小児がんの子どもと家族にとって、外来化学療法は、ライフスタイルを維持し、社会生活を営みながら治療できる。しかし一方では、抗がん剤の副作用に伴う身体的・精神的苦痛に対して、子どもと家族が対峙していかなければならない。さらに、保育園や幼稚園、学校等の社会生活に復帰しても、学業の遅れや友達や教師との関係、治療による容姿の変化、体力低下など問題があることが多い。成人を対象とした外来化学療法に関する調査では、心理社会的問題として、日常生活活動の制限や治療環境の保証、化学療法への期待や不安、心の支えとなる場等の問題があげられている。慢性疾患児の支援に関する調査では、退院後の支援として学校等における継続的支援や社会資源の情報提供、病院システムの改善などの必要性が明らかとなっている。このことから、外来化学療法をうける子どもとその家族も、外来での治療継続において様々な問題を抱えることが予想される。そこで、外来化学療法を受ける子どもと家族のヘルスプロモーションを促す看護援助の検討は急務である。

外来化学療法を受ける子どもと家族の現状を明らかにし、子どもと家族が退院後に直面する様々な問題解決への支援につなげることで、病院という施設の枠にとらわれず、地域を含めた支援モデル（シームレスケア） 構築につなげることができると考える。

２．研究の目的

外来化学療法を受けた（受けている）子どもと家族の現状を明らかにし、外来化学療法を受ける子どもと家族のヘルスプロモーションを促す看護援助を検討することである。

３．研究の方法

研究開始当初は、親に面接をする予定であったが、時間的な制約、子育て期間にあるなど、対象者への負担を軽減するために、質問紙を作成し調査を実施した。

1）研究対象：過去5年[2006-2010年以内]に外来化学療法を受けた（受けている）急性リンパ性白血病の子ども（幼児期～思春期）を持つ保護者30名以上

（過去に外来化学療法を受けた急性リンパ性白血病の子どもを持つ保護者で質問紙に答えることが負担にならない者）

2）データ収集方法:

(1)データ収集期間:2011年7月～2012年3月

(2)データ収集方法:外来受診時に担当医師より研究の主旨説明を行い、同意取得後調査用

紙を手渡した。)質問紙は、郵送にて回収した。
(3)調査項目:属性（対象者及び子どもの年齢、外来化学療法開始時年齢、通園通学の有無等)、外来学療法中の生活に関する質問（体調管理、食事管理、薬剤、通院、交友関係、相談相手等)
(4)分析方法:属性と外来化学療法中の生活に関する質問紙の各項目間の関連については、マン・ホイットニ-U検定、外来化学療法中の生活に関する質問紙の各項目毎の関連は、スピアマン順位相関を用いる。有意水準は 5%とした。統計解析ソフトは、SPSS19.0Jを用いた。
自由記載に関しては、質的分析（記述内容の要旨を抽出し、キーワードとして分類する）を行った。
（5）倫理的配慮：研究の参加は、文書及び口頭にて説明を行い、対象者の自由意思とし、参加しない場合も何ら不利益を受けることはないこと、また、無記名式で行い、個人が特定されないようにすることを保証した。以上について、所属大学の倫理審査委員会の承認を得て行った。

４．研究成果
研究参加者は、27 名で、アンケートの回収は、26 名（回収率 96.2%、有効回答数 25 名）であった。
1）対象者の背景
対象者の平均年齢は、38.5 歳であった。小児がんの子どもとの関係は、父親が 2 名(8.0%)、母親が 22 名（88.0%)、その他 1 名（2.0%）であった。家族形態は、核家族が 20 名(80%)、拡大家族（20%）であった。
2）外来化学療法を受けた子どもの背景
外来化学療法を受けた子どもの外来治療開始時の平均年齢は、4.98 歳（1-13 歳）であった。性別は、男児 12 名（48.0%)、女児 13 名（52.0%）であった。きょうだいの有無について、「あり」が 17 名（68%)、「なし」が 6 名（24%）であり、2 名は、無回答であった。子どもに対する病気説明の有無については、説明されているものが 10 名（40.0%)、していない 13 名（52.0%）であった。親が説明しなかった理由としては、「子どもが幼かった」10 名（76.9%)、「知らせたくなかった」4 名（30.8%）であった。外来化学療法中に通園・通学をしていたものは、19 名(76%)であった。
3）属性と外来化学療法中の生活に関する質問項目との関連
属性による生活に関する質問紙における項目間の有意差は、いずれも認められなかった。
4）外来化学療法中の生活に関する質問紙における各項目の関連
外来化学療法中の子どもの体調管理の大変さと薬剤の副作用の心配、学校等における感染症の発症への心配、友人関係の心配、子どもの体力が他の子どもについていけるかの項目、薬の内服の大変さと家族の体調管理、食事の管理の項目、学校等での教師や子どもの理解や協力が得られるかの心配と学校等での薬剤の副作用の対処、学校等との調整、友人関係、子どもの体力が他の子どもについけるか心配、通院による欠席等の心配の項目において正相関を認めた。また、治療に伴う容姿の変化と学校等における薬剤の副作用の対処、学校等との調整の項目、子どもの体力が他の子どもについていけるか心配と学習の遅れ、友人関係、通院における欠席等の心配の項目、通院における欠席等と学校等での薬剤の副作用の対処、教師や子どもの理解や協力が得られかの心配、学習の遅れ、子どもの体力が他の子どもについていけるか心配の項目においても正相関を認めた。
4）外来化学療法中における子どもを持つ親が感じている困難や心配内容

以下の４つのカテゴリーが抽出された

(1)　食事への配慮

薬の副作用による食欲増進や嗜好の変化のため、子どもの食事内容の工夫（カロリーを抑える、バランス）の困難があげられた。

(2)　子どもの不安定な精神状態

通園、通学している中で、薬の影響で精神的に不安定な状態（イライラ、うつ状態、気分の変化が激しい）となり、それが、友人関係やきょうだいとの関係に影響しないかの不安があがった。

(3)　学校との調整

薬の副作用（特に易感染状態）や体力が落ちていることより、園や学校での体調管理、学校側との調整に関する大変さがあがった。

(4)　きょうだい児の世話の困難

治療中の子ども中心になることによる、きょうだい児の精神面への影響（不安定になる）ことや、きょうだい児に十分に関わることができない（育児、学校行事への不参加）ことがあがった。

5）考察

外来化学療法中は、入院中と異なり、家族特に、親の負担が増加する。薬剤の副作用の対処や園や学校との調整など、外来化学療法中の子どもに起こる１つの問題は、他の問題の困難さや不安の程度に影響していた。子どもや家族は、その困難に対し、対処が困難な側面に対し、医療者がその状況を丁寧にアセスメントし、子どもと家族自身のヘルスプロモーションが促進されるよう支援を検討していく必要がある。今回は、属性の違いによる項目間の有意差はなかった。これは、子どもの発達段階や疾患にかぎらず、個々の家族背景等の把握が重要であることが言える。そのため、子どもの発達段階や治療内容といった側面だけではなく、個々の子どもや家族の状況に合わせた支援の検討が重要であると考える。外来という短時間での関わりの中で、看護師が子どもと家族全体の状況をアセスメントし、支援に繋げていくための方法の検討も今後必要であろう。

外来化学療法中の子どもと家族がどのように日常生活をすごし、治療を続けながらの生活における工夫や困難な点、困難に対する対処の現状が明らかとなった。今回は、調査対象が小児急性リンパ芽球性白血病に限定していたため、他の疾患における家族の現状についても調査し、それぞれの子どもと家族の状況に合わせた継続的な看護支援内容の検討が必要である。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計０件）

〔学会発表〕（計０件）

〔図書〕（計０件）

〔産業財産権〕

○出願状況（計０件）

○取得状況（計０件）

〔その他〕

なし

６．研究組織

(1)研究代表者

藤田　紋佳　（FUJITA　AYAKA）

九州大学大学院医学研究院保健学部門・助教

研究者番号：1043779